

Cact.古典的ケース

Case1

S 夫人、明るい砂色の肌。神経質。26 歳。

子供のころから 16 歳まで、彼女の両親は裕福な環境にいて、彼女は何の心配もなかった。このとき、商売上の破綻が事情を変えた--父親が死んだ—この 16 歳の少女は 21 歳になるまで自分、母親、および 2 人の弟妹を支えた。

この仕事の緊張は、心臓状態の出発点であり、多くの興奮するような経験によって、神経質な悪化の発作を繰り返して起こす傾向が強くなった。

S 夫人は並々ならぬすばらしい、財力を持った紳士と結婚し、彼らはニューヨークと西海岸の多くの医師の診察を受け、最終的にコロラド山に入ることを勧められたが、大気が薄く、彼女はもう少しで死ぬところだったので急いでそこを離れた。S 氏は、事業を営んでいてシカゴに呼ばれた。そこには短い期間ではあるがとどまるよう期待されていた。

1898 年 1 月 17 日、彼らのホテルに呼ばれた。S 夫人が心臓発作を起こしていた--ラウンジに横たわり、手で心臓の辺りを強く押していた。

- 苦しそうな心拍--1 分間に 90 回。
- 好転：手で押す。
- 「強い手によるかのように」つかまれる感覚。
- 時には、意識がなくなる。
- 唇はチアノーゼ
- 通常、それらは 2 時間以上続いた。
- 痙攣性のコッコッという音が呼吸中に。
- 悪化：興奮から。

Remedy X 50m。

Case2

肺水腫の初期の女性は、熱による疲労困憊、不整脈、および呼吸困難を伴い、最初のレメディとして *Veratrum album* が必要だった。かなり改善した後に、激しい絞めつけるような痛みが起きた。Remedy X はすぐに症状を緩和した。ただし治療を完了するのに *Calcarea carbonica* が必要であった。

Case3

心内膜炎の症例において、最初のレメディ、*Arsenicum* の後に、症状が Remedy X に変化した。症例はその後、治療を完了するにもう 2 つのレメディが必要であった。

Case4

心筋梗塞の症例において、Remedy X が最初のレメディとして必要であった。その後 *Lycopodium* と最終的には *Sulphur* が処方され、患者は危険から脱した。

Case5

クラークは、Remedy X が作用した狭心症の症例が、以下の奇妙な感覚を持っていたと話す：まるでスズメバチの大群が心臓まで行こうとしているかのようだった。

Case6

22 歳の若い女性は心臓病があって非常に具合が悪かった。アロパシー医は何が問題か分からなからず、彼女のために何もできないと言った。彼女には、かなりの衰弱があった；心臓から左腕を下向きに手指まで痛みが走る；左側を下に横たわることができない。彼女の兄弟姉妹のうち 5 人が心臓病で死んだ。母は慢性的に苦しんでいた。6、7 粒を粉末 1 包にして舌の上にのせた (Remedy X 1000)。1 時間後、わずかに悪化。きっちり 24 時間後に、ヒステリーのわずかなショックがあり、右腕が頭の上に上がり、神経的引きつりに体中の振戦を伴い；窒息の感覚。これは 2、3 分続いた。それ以来、すばらしく回復した。痛みはもうない。

Case7

30 歳の女性。心臓の周りに重くて締めつけられるような感覚、呼吸困難、不安、左腕の痺れなど。脈拍 91。収縮期および拡張期の雑音が心尖部で聞かれた。

Remedy X 数滴をグラス半分の水に溶かし、3 回に分けて頻繁に繰り返した。

以上